

第44回全国中学校バスケットボール香川大会を経験して

札幌市立札幌中学校 和田圭吾

【0】はじめに

この度、広報委員長である福本先生より原稿依頼があり、僭越ではありますが、参戦記を書かせていただきます。チーム作りから全国までの戦いをテーマにしました。女子チームを観ていますので、その視点が多くなりますし、稚拙な表現もあるかと思いますが、寛大な心でお読みいただければ幸いです。

【1】チーム作りのコンセプト

1. コーチは選手に合わせ、選手は目標に合わせる

この地域はミニバスチームがそこまで盛んではなく、毎年2～3名の経験者が加入するような部です。当然ミニバスで全道大会出場の経験もなく、さらに中学校から始める選手も含めてチーム作りを続けてきました。しかしどの代でも“全国に通用するチーム”になりたいと思い、私自身が選手として感じた“全国との差”を以下の5点に絞り、指導をしてきました。

- ボディーコンタクト
- クイックモーションのシュート
- パスの強さと視野の取り方
- ボールマンディフェンスの間合い
- リバウンド技術

その中でもやはりその代によって差がありますし、そろった選手の特徴も違います。まずコーチとしては、その選手に合わせた戦術を考えるようにしていますし、ファンダメンタルの習得に関しても、練習の細かさ・かける時間を変化させます。また、1回の練習にテーマを設けて、それを習得するための練習を組み立てます。そんな意図があり、毎日練習メニューは変わります。

コーチは柔軟に対応しますが、選手にはめざす目標がぶれないよう、練習の雰囲気や質にとことんこだわります。「日本一の選手は、日本一の練習をする」という言葉をチームで大切にしています。

2. ポジションレス

チームに“ポジション”はありません。ポジション“らしい”ものはありますが、自分がガードなのかフォワードなのか、きつとうちの選手はわからないと思います。その理由は、全員に同じことを要求しているからです。3年生に173cmの選手がいましたが、ポストを中心にプレーしますが、ボール運びもしますし3Pも打ちます。150cm台の2年生も、ポストシールをしますし、リバウンドもします。「誰でもいいから、今チームに必要なだと思うことをすぐにプレーする」ということは、このチームの1つのコンセプトだと思っています。そうすることで、コーチとして見抜けていない選手のポテンシャルを引き出せることにもなるし、選手の“のびしろ”が増え、中学から高校に進んでも成長しやすい選手になるだろうと考えています。

このチームは特に大型選手がいたので、将来的にどう育てていくかというのが大きなテーマでした。本人は「プロや日本代表をめざしたい」と自ら言えるような気持ちでしたので、173cmであれば将来的にはガードであるし、でもチームではポストにいてくれないと厳しいし、というところから5アウトのモーションオフェンスをチーム戦術として取り入れ、誰でもどこでもできることを大切にしました。それもポジションレスにつながった1つの要因と言えます。

3. 大枠から細部へ

ある程度の年間計画を立てて、新チームの始動から、チームの約束やシステムの練習に取り組みます。その中で不足しているファンダメンタルや、ルール浸透のための分解練習を見極めて行っています。しっかりとしたファンダメンタルを習得させてから、大会前に戦術的なことに取り組むこともやってみましたが、選手が“必要に感じる”気持ちが強くなることがわかり、この順序で指導をしています。特にオフェンスを教えることはなかなかむずかしいので、早い段階から取り組むように心がけています。

【2】新チーム始動から中体連

シーズン序盤は戦術も浸透し、チームも上り調子でしたが、新人戦南大会での敗戦からチームの歯車は大きく狂い始め、思うようにチームが伸びていかず、その時期に女子チーム特有の人間関係の揉め事なんかもあり、バスケットボールに集中できない時期を作ってしまいました。チームのピークをコントロールすることができず、コーチとしての未熟さを感じました。決戦大会・北海道カップ（道外チームを招待し、全道上位チームと対戦する大会）への出場を逃してしまったことで、経験値は十分ではありませんでしたが、逆を言えばその悔しさがあったからこその中体連とも言えます。

札幌市の中体連前もなかなかピークは上がりず、「ゲームを通して徐々に上げていけるように」と考えながらも、あせりを感じていました。そんな中、中体連直前の練習試合で、勝ち上がれば対戦するであろうチームに大敗しました。しかし、このゲームがチームにとってのターニングポイントとなりました。目が覚めたといえいいでしょうか、「勝ち上がりたい！」という本気度が、選手も私自身も高まりました。負けから勢いを得ることができました。本番では、これまで公式戦で2度負けていた東月寒中に逆転勝利し、直前に大敗した新川中にも後半の猛烈な追い上げをしのぎ勝利。全道大会への切符を得ることができました。

全道大会前は、この流れを維持しながら戦術の修正を続けました。選手から疲労感をあまり感じていませんでしたが、蓄積はあったように思ったように身体が動かず、1回戦から非常に厳しい戦いでしたが、なんとか勝ち進めることができました。前日をギリギリで勝ち進めたことで、準決勝での江別第二中戦は、身体の疲労はたまっていたのですが、心はリラックスして臨むことができました。出だして点差を離されましたし、中盤も追い上げられる場面がたくさんありましたが、選手に焦る様子はなく、要所を締めるプレーができましたし、前日のスカウティングからの対策も落ち着いて行っていました。

決勝の清田中戦は、エースの宗形選手がいないにも関わらず、勝利することができませんでした。経験の差もあったでしょうが、プライドであったり、気迫であったり、全国を見据えるという差を感じたゲームでした。

【3】全国を実際に経験して

結局、予選リーグ敗退という結果となりました。原因については、いくつか考えられることがありますが、大きな原因として“全国で勝ち抜くという具体的なイメージがまったくなかったこと”が挙げられます。道外遠征は行っていませんでしたし、唯一のチャンスだった北海道カップ出場も逃しました。よって、この大会が道外チームとの初めての試合です。170cm オーバーの選手は各チーム2～3名は確実にいますし、都府県によってプレーのリズムは微妙に違います。そこへアジャストする力を持ち合わせてはいませんでした。なにより全道大会後、怪我人が続出し満身創痍で香川入り、さらに前日の公開練習でスタメンの1人が怪我をするというアクシデントにも見舞われました。雰囲気にも飲まれ、力を発揮できないというよくあるパターンにはまってしまい、準備不足を痛感することになりました。

それに比べ、清田中は毎年の経験もあってか、北海道では観られない“全国バージョン”の清田中でした。負けてしまった大阪薫英戦もすばらしい追い上げでした。全国を見越して戦うというヒントをもらえた気がしますし、高橋和也先生の指導力にあらためてすごさを感じました。

【4】全国との差

高島先生率いる北海道選抜が全国準優勝を果たし、清田中が惜しくもベスト4を逃しました。予選で負けたコーチが言うのもなんですが、北海道の女子チームと全国との差はあまり感じませんでした。ただ、全国制覇を北海道チームができるかと言えば、それはまだ厳しいという印象でした。

準々決勝の愛知県藤浪中 vs 福岡県二島中のゲームは、今大会のベストゲームであったと言えます。すばらしいガードと175cm オーバーを数名擁する王者藤浪中に、170cm 台が0人の二島中が挑みました。二島中のリバウンド・ルーズボールへのこだわり、迷いのないシュート、激しいディフェンス、文字で表わすのは簡単なのですが、我々コーチが普段から選手に求めていることを、最高レベルでプレーするチームでした。決して特別なことはしていませんが、身長ではない部分でも勝負できるという証明をしていました。藤浪中もその激しさにあせることなく、かつ同じように激しくプレーし、感動すら覚えるゲームでした。

その2チームと北海道チームの違いを考えると、やはり“オフボールでの準備”があると考えています。簡単に言えば、このゲームはボールを目で追わなくても楽しい。それぞれの選手がオフボールで意図をもって、戦っています。オンボールでの攻防に関して、北海道のレベルは全国的に見ても低くはないと思います。ただ、オフボールでの質は低い。北海道のレベルアップの鍵が、そこにあるように感じました。

それともう1つ。東海大四を倒しベスト4に進出した男子の鳥屋野中についてです。監督は私と同期の堀コーチ（能代高校のキャプテンでした。）で、どんなチームなのか楽しみにしていました。びっくりするほどさわやかで、すがすがしいチームでした。選手のプレーはとにかく必死で選手同士よく声を掛け合いチームとして戦っていました。プレーでも観ている者の心を揺さぶりましたが、その姿勢にはもっと心を揺さぶりました。後半開始早々、鳥屋野中のエース級の選手が5ファールで退場しました。彼は3年生でこれが最後のゲームです。普通であれば悔しがったり、涙を流したりするでしょう。しかし、彼が取った行動は、しっかりと手を挙げ、相手チームのコーチの前に行き、あいさつをしたのです。そのコーチもその姿勢を受け、しっかりと握手し、一声かけていました。このシーンには感激しました。同じ年齢で、そんなチームを創り上げているということに大きな刺激を受けました。

【5】終わりに

今回、コーチとして初めて全国を経験させていただきました。「全国に行かないとわからないことがある」と、常々諸先輩方がお話しされていましたが、まさにその通りでした。コーチとしてめざすものが、より明確になりました。感覚的な部分も多いのですが、全国で得た部分が少しでも読んでいただいている皆様に還元されていれば、幸いです。

現在、道ジュニア連盟の取り組みの1つに“コーチ塾”という若手指導者を育成しています。確かに若手指導者は、コーチングを学ぶということも必要であると思います。しかし、それだけでは勝てるチームにはならないと、私は考えています。私は、今シーズンより日本公認審判となりました。そのことでゲームに対する“視野”が広がり、コーチングに良い影響を与えました。はじめはモチベーションがなく、嫌々やっていた時期もありましたが、審判経験や上級審判の方々との交流で感覚が磨かれ、今のコーチングを支えています。もっともっと若手指導者は、審判活動に取り組んでいくべきです。

北海道の中学生女子チームが全国を制したことは、過去ありません。

「いつか優勝杯を北海道に！」

その気持ちを強くもつことができました。今後も北海道が、ライバルとして切磋琢磨しながら、かつ同じ北海道として一丸となっていくことを願い、自分も微力ながら尽力していきたいと思えます。

北海道ジュニアバスケットボール連盟の一員であることに幸せを感じていますし、そこにいるみなさんのおかげで、このような貴重な経験をさせていただきました。この場を借りて、お礼申し上げます。ありがとうございました。今後もよろしく願いいたします。